

(川 島) ナガスは調査船の発見後すぐ捕るのか?

此前アラスカ湾で操業した時には50~60マイル/日位の速度で移動していたが...

(加 藤) 必ずしもすぐ捕らない。ペ海では発見位置や頭数が捕獲実績と一致するので群の移動は著るしくないと考えられる。

(河 村) イワシとナガスの捕獲比はどのように変わってきたか?

(加 藤) 以下のとおりである。

	イワシ	ナガス
1965	33.3 %	66.7 %
1966※	50.5	47.9
1967	63.7	36.3
1968	81.7	18.3
1969	82.5	17.5
1970	85.0	15.0

※ シロナガス1.6%

(大 村) 捕獲禁止鯨の発見状況はどうか?

(加 藤) 日水の資料では以下の通りである。

年次	シロナガス	ザトウ
1965	28	99
1966	28	98
1967	10	38
1968	34	17
1969	44	76
1970	15	86

つまり、シロナガス、セミは資源回復のきざしはなく、ザトウは繁えているとみられる。

(大 村) サトウはシロやセミと異って明白な資源減少の事実に基づいて禁止されたものではない。

3. 19次北鯨イワシ鯨操業概況

川 島 和 幸(極洋捕鯨株式会社)

昭和45年5月2日横浜港を出港し5月6日操業開始8月19日にヒゲ捕獲枠B.W.U. 284.16

(Sei 1204, Fe 167)を達成した。

1. 東経ヒゲ操業 — (1)

5月6日—5月17日 Se 94 (@7.8) の他 Fe 67 Sp 81

オホーツク海より出た高気圧が160°E付近にあり西経の中緯度高気圧が動かない為180—170°Wは深い気圧の谷となっていた為気象の上から漁場着のタイミングはよかったと思う。而し水温は前年比2℃以上低かったようでイワシの漁期は遅れていると感じた。

2. 西経南側ヒゲ操業

5月18日—6月18日 Se 487 (@15.2) Fe 15 Sp 164

高気圧と共に東進し中緯度高気圧の圏内で天候は比較的安定していたが船団の北側を東進する低気圧が時々発達した為偏西風帯となり又ガスの来襲することもあった。西経173°—160°間収斂線上にイワシの発見があったが暖水の力が弱かった為か南北方向の漁場巾は狭く他船団が集結するようになるに小型鯨ばかりとなり且つ6月16日以降は天候も悪化したので東経漁場にバックした。

3. 東経ヒゲ操業 — (2)

6月19日—7月3日 Se 228 (@15.2) Fe 5 Sp 41

高気圧の圏内なるも前線帯が東西に横たわり南北に変動するため列島南側は時化ガスが連続し天候と漁場のタイミングを合わせるのに苦慮した。発見のイワシ鯨は4—5頭連れの集りであったが大型の為歩留りは向上した。

3日からガス域をかかわす為に北上し7日迄列島沿いの抹香操業で繋いだ。

4. 東経ヒゲ操業 — (3)

7月8日—7月29日 Se 395 (@9.2) Fe 80 Sp 307 Mi 9

オホーツク海の高気圧も出現したが東経漁場は例年通りガスに悩まされる日が多かったので晴れ間をみて操業し捕獲ベースの維持につとめた。而し30日には発見も切れ天候も悪化したので前回操業した列島沿い抹香漁場向け北上し、8月16日迄18日間Spを主として操業しこの間に Se 17 Mi 9 を捕獲した。

此の頃北寄りの漁場はカナダ沿岸を除き広いガス帯となり操業困難な状況となったので17日より南下し19日の Se 23 F 1 を以ってヒゲ捕獲枠 B.W.U. 284.16 (Se 1204, F 167) を終了した。

5. 160°W以東の漁場について

今次の操業では第2極洋丸船団は160°W以東の漁場には入っていない。

アラスカ漁場に於けるイワシの本格的操業は第12次北鯨に於ける極洋丸船団をもって始めとするが当時は西経155—138°間の北緯55°以北が主漁場であった。その後変遷はあったが

漁場南偏の傾向があるように考えられる。

		16北-19北 日本船団イワシ 捕獲実績					
		東 経			西 経		
45°N 以北	16北	2291頭	76日	1日当り 30.1	1,114	53日	21.0
	17北	2458	96	25.6	753	28	27.0
	18北	1596	108	14.8	1,004	65	15.4
	19北	1076	76	14.2	797	55	14.5
45°N 以南	16北	69	6	11.5	0	0	0
	17北	594	19	31.3	14	2	7.0
	18北	196	14	14.0	795	30	26.5
	19北	112	13	8.6	1,250	70	17.8

〔質疑応答〕

- (宇田) 第12次(1963年)はアラスカ湾イワシが大型であり、今年もまた大型であった。海況の類似性はみられないか?
- (川島) よくわからない。ただ兩年ともオキアミ餌料が顕著であったと思う。全体にみて、アリューシャン列島沿いではCalanus、魚類が主餌料で肉質、色共に悪く、アラスカ湾ではオキアミ餌料で肉がよい。
- (町田) 18北ではコマンドル、カムチャッカ方面でイワシが捕れたが、今年はどうか?
- (川島) 調査したがイワシ、ナガス共に全然発見されなかった。
- (町田) アラスカ湾の大型イワシは緯度の増加と共に大きくなり性的成熟個体が多くなる。このバウンダリーはほぼ45°N線にあるようだ。
- (正木) 海況は不明だが、少くとも標識結果では45°Nを境界とするそのような系統群上の相異はないものとおもう。

4. イワシクジラの群れの調査結果

町田 三郎(鯨類研究所)

1. はじめに

鯨類は単独で遊泳していることもあるが、数頭一緒になって遊泳している場合もしばしば観察する。このように鯨類は程度の差はあっても、他の多くの動物と同様に大体において群れをなして、または集団をなして生活しているようである。

鯨類の群れの研究はその習性と生活の季節的周期を知る上で興味ある主題の一つであると考えられるが、鯨類は水中で生活しているため観察が極めて困難であり、また相互のコミュニケー